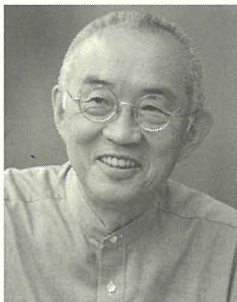


フロンティア海洋をめざそう

東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男



低落しつつある日本

日本の一五歳以下の人口比率は世界最小であり、六五歳以上の人口比率は世界最大である。日本政府の長期債務残高の対国内総生産比率は世界最大であり、国際観光収入の対国内総生産比率は世界最小である。東京での生活費用はニューヨークの一・二倍で世界最高であり、オフィスの賃料も世界最高である。国家の基

礎である人口も経済も最悪の状態であり、そこで生活や仕事をする条件も世界最悪というのが日本の現状である。

そして国土面積はロシアの四五分の一弱で世界の六一番目であり、残念ながら、その国土から化石燃料や鉱物資源はほとんど産出されず、石油も石炭も完全に海外に依存し、エネルギー自給比率は四パーセント、鉄鉱石や銅鉱石、アルミニウムの素

になつてしまふ。

しかし、そうではない。日本は大国なのである。日本に経済的管轄権のある海岸から約三七〇キロメートル沖合までの排他的経済水域の面積は国土面積の一二倍近くあり、世界七位である。日本列島周辺の海域は日本海溝をはじめ多数の海溝が存在する深海であり、排他的経済水域の海水の体積は世界四位である。そして六〇〇〇以上の島々が点在する結果、海岸線長は世界五位であり、国民一人あたりでも世界九位になる。

資源の宝庫である日本近海

日本は海洋大国なのであり、そこには陸上とは比較にならない資源が存在している。誰もが想像するのは魚など生物資源であるが、昨年の調査結果では、日本近海には一五万種以上の海洋生物が生息し、世界有数のホットスポットである。海水には生物だけでなく、様々な鉱物が溶融し、現状では採集しても採算がとれないが、金は陸上の一三〇倍以上、ニッケルは約六〇倍が存在するなど、日本列島周辺は資源の宝庫な

のである。

さらに、海底にはマグマから海中に浸出した鉱物資源が沈殿している熱水鉱床が存在し、それらは地上の鉱床の鉱物資源の数倍の品位であるし、有望なエネルギー資源として注目されている、メタンが圧縮されて海底で固体になっているメタンハイドレートも日本列島周辺に大量に存在し、現在の水準で利用すれば、数百年分は賦存していると推定されている。陸地では小国である日本も、視点を海洋に移動させれば大国なのである。

そして素晴らしいことに、日本は海洋を開発する技術では世界の先端にある。日本が保有する深海探査を目的とする有人潜水調査船「しんかい六五〇〇」は世界最高の性能を持ち、海上から海底一〇キロメートルまで掘削する能力のある地球深部探査船「ちきゅう」は世界唯一の存在である。潜水して海中を自走できる深海巡航探査船「うらしま」の航続距離は、世界記録を達成している。資源の宝庫と開発の技術が国土の眼前に存在する。

海洋大国復活へ覚醒の年に

ところが重大な問題がある。日本の海洋に関連する活動が心細いのである。一九九〇年代まで日本は世界最大の漁業王国であったが、現在では中国やインドに逆転され世界六位になつてしまひ、かつて輸出までしていた魚介も、現在では国内消費の半分以上を海外から輸入している。一九七〇年代に、世界の船舶の半分以上を生産していた造船王国は、二一世紀になつて中国と韓国に大差をつけられて三位に低落している。

これら産業だけではなく、国民の生活も海洋とは疎遠になりつつある。ヨットやモーターボートなどの保有台数は二〇〇〇年頃から減少し、人口あたりではアメリカの二分の一、オーストラリアの一二分の一であり、海洋クルーズに参加する人数も人口あたりでアメリカの八分の一、オーストラリアの七分の一でしかない。新年にあたり、低落しつつある日本を蘇生させる威力を持つ海洋へ、国民が目覚めることを期待したい。

絶賛発売中!!
詳細は8頁をご覧ください

